

字音接尾辞「式・風・的」の意味

——プロトタイプとスキーマ——

山下喜代

一 はじめに

語構成論において字音接尾辞は、「前接語基・意味・品詞性」の三つの観点から論じられることが多い。すなわち、どのような語基と結合し、前接語基にどのような意味を添加し、語基をどのような品詞に転換するのかということである。字音接尾辞の中で、比較的造語力が強く、使用頻度の高いものに、相言類の接尾辞「式・風・的」がある。ここでいう造語力が強いとは、二字漢語はもちろんのこと、和語や外来語とも

結合し、さまざまな合成語を形成する力があるということの意味にしている。また、使用頻度については、国立国語研究所の「現代雑誌二〇〇万字言語調査」の「度数順語彙表」によると、五九二二三語の自立語の中で、「式」は三六七位、「風」は五二三位、「的」は四四位であり、いずれも使用頻度は比較的

高いといえる。また、品詞性については、事物の形容や状態を表現する合成語を形成し、「泥縄式な政策」「山小屋風なカフェ」「科学的な実験」など名詞の前接語を形容動詞語幹に転換する機能をもつといえる点で共通している。一方で、これらは「日本式建築・日本風建築・日本的建築」と類義語とも捉えられる合成語を形成する。では、これらの合成語には意味的にどのような違いがあるのだろうか。これらの合成語の意味の違いは、その語構成要素である字音接尾辞「式・風・的」の意味的な相違に由来するものと考えられる。

本稿では、まず、接尾辞「式・風・的」について、先行研究の論考を踏まえて、それぞれの意味の違いを明らかにし、認知意味論におけるプロトタイプとスキーマの概念を用いて、その意味ネットワークの記述を試みる。この場合、接尾辞の意味は、それを構成要素とする合成語の分析から抽出されるもので、接

尾辞単独では、意味は確定しない場合が多い。したがって、直接的な分析対象は合成語となる。さらに、合成語の分析を通して、日本語において接尾辞「式・風・的」の使い分けが、外界認知のどのような違いから生じているのかという点について論じることとする。

二 多義字音接尾辞の意味ネットワーク

国語辞典の語義の記述からも明らかなように、本稿で取り上げる字音接尾辞「式・風・的」は、いずれも複数の意味をもつ多義の形態素といえる。多義語の意味分析について、初山(二〇〇一)は、認知意味論の立場から以下の四つを課題として挙げている。

- (1) (それぞれ確立した) 複数の意味の認定
- (2) プロトタイプの意味の認定
- (3) 複数の意味の相互関係の明示
- (4) 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明

本稿では、字音接尾辞「式・風・的」について、それらを構成要素とする合成語の分析を通して、それぞれにこの四つの課題について考察し述べることにする。まず、その前提として、プロトタイプの意味とスキーマについて定義する必要がある。初山(二〇〇三)では、多義語のプロトタイプの意味について、「複数の意味のなかで、最も基本的であり、慣習化の程度・認知の際だちが高いといった特徴を備えたもの」と述べて

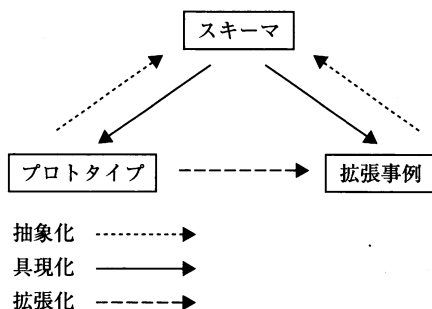
いる。そして、用法上制約がない、あるいは制約が相対的に少ない意味をプロトタイプの意味と認定することができるとしている。また、スキーマとは、「カテゴリーのすべてのメンバーあるいは一部のメンバーに適合する抽象的な意味」とされている。本稿においても、この定義に従うこととする。

また、多義語における「複数の意味の相互関係の明示」とは、複数の意味がどのような仕組みで意味拡張しているのかを明らかにすることである。ここでいう「意味拡張」とは、「ある語において従来とは異なる新たな意味が派生すること」を意味する。初山(二〇〇三)は、複数の意味の相互関係の明示は、シネクドキーやメタファーといった比喩に基づく方法で行うことができるとしている。また、「複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明」については五つのモデルを取り上げているが、本稿では、「拡張とスキーマに基づくネットワーク・モデル」を基にして考えることにする。このネットワーク・モデルは「tagacter」(一九八七・二〇〇〇)などで示されたものである。ネットワーク・モデルはプロトタイプとスキーマ及び拡張によって意味の相互関係を示したもので、山梨(二〇〇〇)では、その関係を図1のように表している。

「拡張事例」とは、「あるカテゴリーの典型的な事例(すなわちプロトタイプ)と類似している新たな事例」のことである。図1において、実線矢印は、スキーマからの具体事例化を表す。破線矢印は、プロトタイプからの拡張事例への拡張を表し、点

線矢印は、プロトタイプの典型事例と拡張事例の類似性、共通性に基づいたスキーマの抽出、すなわちスキーマ化を表す。

以下では、字音接尾辞「式・風・的」を構成要素とする合成語の分析を通じて、それぞれの意味ネットワーク・モデルの記述を試み、三つの接尾辞の使い分けが、話者の外界認知のどのような違いに基づくものなのかという点について論じることとする。



山梨(2000, p181)

図 1

三 接尾辞「式」

三ー「式」の意味

荒川(一九八六)、山下(一九九七)などでは、日本語の「式」を含む合成語は以下の三種類に分けられている。

- ① 結婚式 就任式 始業式
- ② 方程式 不等式 構造式
- ③ 日本式 回転式 スプレー式

このうち、漢語を始め、和語や外来語、固有名詞とも結合し、接尾辞として造語力を発揮するのは③の用法である。③の「式」は、『日本国語大辞典』(小学館)においては、「語素」と表示され、「名詞に付いて、型・様式・方法などの意を表す」と記されている。

山下(一九九七)では、「新聞記事データ」から抽出した「弥生式土器・自動ドア式出入り口・可動式観客席・ティーパックス式だし」などの合成語「X式Y」を対象に分析を行い、前接語Xと「式」との意味的な結合関係を6種類に分類している。そして、「式」は「方法・様式」の意味を明確に示すものから、その意味が抽象化されたもので、段階性があるとしている。さらに最も意味の抽象化された「式」の機能は、前接語Xをひとつの「例・例え」として提示することと捉えられると述べている。本稿では、山下(一九九七)の論考を基に、「X式Y」における前接語XとYとの関係を次の(a)から(d)の四つに大別できると考え、考察する。

(a) 「X固有の方法や様式に基づくY」

前接語Xは人名・地名などの固有名詞を主とする。この場合は、「式」が「型・方法・様式」などの基底の意味を前接語Xに付与している。

スバルタ式教育、イラン式イスラム革命、ヨーロッパ式服装、日本式庭園、弥生式土器、ヨーロッパ式服装

(b) 「Xを内蔵するY」

YはXで表される「方式・システム」などを内蔵している関係にある。

デジタル時計、二槽式洗濯機、ピストン式エンジン、自動ドア式出入り口、浄化槽式トイレ、水晶発振式時計

(c) 「Xの状態・形状であるY」

XとYに意味的な所有関係はない。Xは状態性・動作性を含む語である。

巡回式設備、自炊式ロジ、折りたたみ式ステッキチェア、可動式観客席、密閉式ゴムボート、水平式運河

(d) 「Xが有する機能や形状を備えたY」

XはYの表す物の状態・形状を比喩的に示している。意味が抽象化している。

トンネル式大備蓄庫、カード式富くじ、ペンダント式無線発信機、ティーパック式だし

そして、(d)の意味がさらに抽象化された例が「ところでん式、いもづる式、ゆきだるま式」などの合成語である。

以上に述べた(a)から(d)に分類される合成語「X式Y」を前接語Xで分類すると、(a)は固有名詞、(b)は具体物を表す名詞、(c)は状態、動作を表す名詞、(d)は比喩を表す名詞となっている。

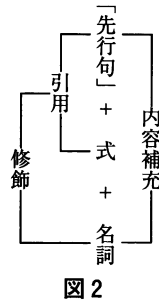
さらに、山下(一九九七)では、(1)、(2)のように「式」が語ではなく、句に後接して一つの名詞句を形成し、連体修飾語として機能する例について考察している。

(1) モーターでかき回す式のもの(浄化槽)

(2) 国民の間には、「長いものには巻かれろ」式(の) 考え方が強くなっているようだ。

そして、(1)のような例は、「式」を「方式」に置き換えることができ、先行句「モーターでかきま回す」が「式」を修飾しており、「式」の意味は語構成要素として機能するときの基底の意味「方法・方式」を明確に表しているとしている。それに對して、(2)のような例は、「式」を「方式」に置き換えることはできないとして区別して論じている。すなわち、この(2)のような例において、「式」は引用の助詞「と」に共通する機能を果たしていると述べている。さらに(2)において助詞「の」を介在させずに後接語と結びつくことができることから、「式」は、引用の助詞「と」の働き(引用機能)と、連体修飾の機能を果たす助詞「の」の働き(修飾機能)をともに有するとしている。すなわち引用の複合辞「との」に共通する機能があると指摘している。ただし、複合辞「との」との違いとして、「式」

は、類例の提示や例示の意味が含まれていると述べている。また、先行句は被修飾名詞の具体的な内容を表しており、内容補充の働きをしていると捉えている。以上の関係を示したものが図2である。



本稿では、このような機能を果たす「式」を「助辞化」と捉え、これを「文法化」と呼ぶことにする。「文法化」とは、西山・深田（二〇〇三）によると、「語彙的な要素が特定の用法において文法的な要素になったり、文法的な要素がより文法的になったりするという、言語変化の一種」と定義される。そしてこの文法化の特徴として「元の意味の希薄化」が指摘されている。

以上の分析を踏まえ、以下では、接尾辞「式」の「プロトタイプの意味」と「複数の意味の相互関係」について考察し、意味ネットワークを示すことにする。

三二 接尾辞「式」のプロトタイプとスキーマ

前節で述べた分類を基に、ここでは前接語Xと接尾辞「式」

の関係から、「式」の意味を以下のように、A、B、C、Dの4種類にまとめた。すなわち、(b)と(c)は、ともに「式」が「型・方式・様式・システム」などの意味を明確に表し、前接語Xがその方式の内容を表している点で共通するため、一つにまとめAとする。そして主に固有名詞を前接語にとる(a)をB、(d)をCとする。さらに、「文法化」と捉え、本来の意味が希薄になった「式」をDとする。

A「式」が「システム・方法」などの意味を添加し、前接語Xがシステムや方法の具体的内容を表す。

自動ドア式出入り口・可動式観客席・水平式運河

B「式」は「システム・方法」などの意味を添加するといえるが、その意味は合成語レベルでは明確ではない。また、前接語Xは直接的にその具体的な内容を表すものではない。

日本式庭園・スパルタ式教育・長谷川式漢字表記法

C「式」が「ような」の意味を添加し、合成語「X式」がメタファーを表す。

ペンタント式無線発信機・泥縄式勉強法・雪だるま式錬金術

D「式」が「と／との」の意味を添加し、引用句「X式」が例示を表す。

これらA、B、C、Dのうち、「最も基本的で、慣習化の程度・認知的際立ちが高い」といった特徴を持つものは、Aの意味であると考える。Aに分類される合成語は、前接語Xが具体的なシステムや方式の内容を表しているため、合成語「X式」全体

の意味も明確である。すなわちAの意味がプロトタイプである。Bの合成語は、前接語が固有名詞であるものだが、例えば「日本式」といわれても、それが何を意味しているのかは、明確ではない。「日本式庭園」や「日本式建築」のようにさらに大きな言語単位になるか、文脈に依存することによって意味が確定するといえる。このことから、BをプロトタイプAから派生した拡張と捉える。さらにCはメタファーに基づく意味拡張と捉えられる。Dは「式」が複合辞「との」に通じる機能を果たしており「文法化」していると捉えた。このことは、Cが比況の助動詞「ような」と同様の働きをすることと共通している。そのことから、DをCからの更なる文法化への拡張と捉える。

スキーマ化については、プロトタイプAと拡張事例Bの抽象化によって基本スキーマEを抽出し、「Xが表す知覚可能なスタイルやシステム」と記述することにする。さらに拡張事例Cと基本スキーマEの抽象化は、スキーマF「Xから想起されるスタイル、状態」のように記述することにする。また、拡張事例Dをも包括するスーパースキーマは抽出できないと判断した。スーパースキーマが必ずしも抽出できるとは限らないことはすでに指摘されていることである。図3は、以上に述べた「式」の意味ネットワークモデルを示したものである。

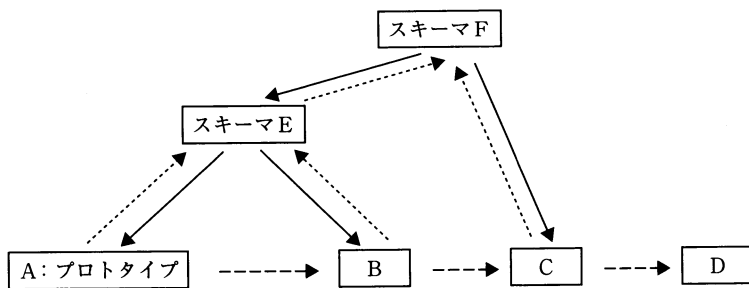


図3

四 接尾辞「風」

四―一 接尾辞「風」の意味

ここで取り上げる「今風・日本風・サラリーマン風」などの「風」については、『日本国語大辞典』では以下のように記述されている。

〔語素〕 名詞に付いて、それに類する、いかにもそれらしいなどの意を添える。①形式・様式などについていう。『教会風』『西洋風』『ゴシック風』『殿中風』など。②人についていう。『商人風』『役人風』『学生風』『天才風』など。

山下（一九九八）では、『新聞記事データ』から抽出した名詞句「X風のY」におけるXとYの関係から、「風」の意味・機能を次のように二つに分けて説明している。

(a) 前接語Xに具体的な意味を添えるというよりも、Xを相言類に変える機能を果たすとともに、それに「くらしい」や「くような」といった意味を添える「助辞的」な働きをする。

屋台風の食べ物屋、白壁土蔵風の建物、フランスパン風の食パン

(b) 前接語Xに「様式・雰囲気・感じ」といった意味を与える。

フランス風のウィット、スペイン風のデザイン

これらの合成語「X風」の前接語Xについてみると、(a)は場所・人・芸術・物などを表す名詞で、(b)は固有名詞である。

この分析を基に、ここでは接尾辞「風」の意味と前接語Xの

関係を以下のように記述する。

A 「風」は「様式・雰囲気・感じ」などの意味を添加し、前接語Xのそれが顕著なことを表す。

日本人風の発音・歌舞伎風の様式・東洋風の旋律

B 「風」が「くような」の意味を添え、合成語「X風」がメタファーを表す。

キモノ風のジャケット、Tシャツ風の上着、倉庫風の店

四―二 接尾辞「風」のプロトタイプとスキーマ

Aに分類される「風」がプロトタイプで、Bはメタファー

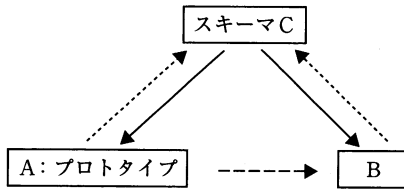


図 4

に基づく拡張と捉えられる。スキーマCは「Xが有する特色をもち、Xを感じさせる雰囲気があること」と記述することにする。以上の分析から、接尾辞「風」のネットワーク・モデルは図4のようになる。

五 接尾辞「的」

五―一 接尾辞「的」の意味

字音接尾辞の中で「的」は、最も多く研究対象として取り上げられているものであるが、ここではまず、国語辞典の記述から見ることにしよう。『日本国語大辞典』では「的」について「名詞、特に抽象的な意味を表す漢語の名詞や体言的な語および句について、体言、または形容動詞語幹をつくる」場合の意味としては、「そのような性質をもったものの意を添える」とある。また「漢語について、直接、または「な」をともなつて連体修飾語として用いられるほか、形容動詞語幹として用いられる」場合の意味としては、「④そのような性質を有する、それらしいの意を表わす。⑤それに関する、それについての、その方面にかかわる、などの意を表わす」と記述されている。

ここでは、「的」の合成語が連体修飾語として用いられる場合について、山下（一九九九）、（二〇〇〇）における分析に基づき述べることにする。山下（一九九九）では、新聞を資料として異なり一一四〇の「的」を含む合成語を抽出し、例えば「現実的政策・全社的リストラ」などの「X的Y」という単位の場合

成語を分析することによって、語形成における「的」の機能を考察している。そして「的」の機能は次の三種に分類できるとしている。

(a)「的」が前接語Xの表す属性概念で後接語Yを限定する役割を果たす。

(b)「的」が比喩を表す助動詞と同じ役割を果たす。

(c)「的」がある種の助詞や複合辞や語連続と同じ役割を果たす。

(a)に分類される合成語「X的Y」は、「YがXの性質を有している」「YがX（の／する）状態である」あるいは「X性を有するY」「X（の／する）状態であるY」と表すことのできるもので、前接語は抽象度の高い漢語が多いとしている。例として「本質的問題・急進的改革・驚異的経済発展」などが挙げられている。

(b)は、「XのようなY」と言い換えられるもので、前接語Xは比喩の対象となりうる具体的な概念や指示物を表すものであるとしている。例としては「記念碑的作品・掛け言葉の用法・やみ討ち的増税」などが挙げられている。

(c)は「的」が「XにおけるY」「XとしてのY」「Xに対するY」など、多様な意味を担ってXとYを結合しているもので、例として「時代的要請（時代における要請）・基盤的防衛力（基盤となる防衛力）・音楽的教養（音楽に関する教養）」などがある。金澤（二〇〇五）では、「的」の新用法として、主に「X的には」の形態で用いられるものについて考察をしている。そして従来

の用法に対して、新用法を「属性用法」と「主体用法」に分け、その用法を以下のように説明している。

「属性用法」―圧倒的に「に(は)」の後接する割合が高く
なり、「ゝの面で(は)」といった、個々の属性面での評価
を表わす用法である。その典型的な例として、「場所的」値
段的「長さ的」「雰囲気的」「気持ち的」などが挙げられ、「ゝ」
に入る語の制限は緩く、ヴァリエーションはかなり多い。

「主体用法」―「には」の後続する割合が特に高く、「ゝとし
ては」「ゝの立場では」といった、主体の立場や見方を表
明する用法となる。「ゝ」の部分には「わたし」や「自分」
を初めとして、一人称を主とする人(称)を示す語が入る。
また、述語には二元的・絶対的な好／悪の感情を示す表現
が来ることが多い。

金澤(二〇〇五)における「的」の新用法は、連体修飾語と
しての用法ではないので、その点は山下(一九九九)の分析対
象とは異なるが、合成語単位の意味から見ると、「属性用法」
も「主体用法」も、「的」が、ある種の助詞や複合辞と同じ役
割を果たす(c)の意味といえるだろう。例えば、「属性用法」と
される合成語について、その連体修飾用法の例「場所的制約」
「気持ち的なバリアフリー」について考えると、「場所の面での
制約」「気持ちの面でのバリアフリー」という意味と解釈される。
「ゝの面で(は)」になるか、「ゝの面での」になるかは、合成
語レベルではなく、それに後接する助詞の違いによるといえよ

う。また、「わたしの」については、「わたしの生き方」「わた
しのコスメ事情」の例を見ると、「わたしとしての生き方」「わ
たしについてのコスメ事情」などと解釈される。主体の「立場
や見方」を表明する意味になりうるのは、後接する助詞による
と考えられる。

一方、山下(二〇〇〇)では、次の例のように、「的」が語
の範囲を超えた句や文に後接してそれらを取り込み一つの単位
体を形成するものについて考察している。

(3)「そこまでやるか」的趣味をもつＪリーガー人大集合

(4)疑わしきは罰する「的」な報道は控えよう

そして、このような「的」の用法については、以下のように
述べている。

引用機能による「例示」の意味があり、連体修飾構造「X
的(な)Y」において「的」は、複合辞「ゝというような」
と共通する機能を果たしていると考えられる。

このような引用機能を果たす用法についても、意味の上から
は、先に述べた(c)に分類されるものといえる。

以上の分析を踏まえ、次節では、「的」のプロトタイプの意
味と複数の意味の相互関係について考察し、意味ネットワーク
を示すことにする。

五・二 接尾辞「的」のプロトタイプとスキーマ

前節の分析に基づき、本稿では前接語Xと接尾辞「的」の関

係から、「的」の意味を以下のようにA、B、Cの3種類に分ける。
A 何らかの対象について「的」が、「前接語X」のような性質や状態を有することを意味する。

弾力的判断、優位的地位、機動的組織、多面的調査研究

B 「的」が、「ような」の意味を表し、比喩標示の役割を果たす。合成語「X的」はメタファーを表す。

カリスマ的指導者、教祖的存在、コンサルタント的立場

C 「的」が、「における」「として」「の面で」「という」などの意味を表し、ある種の複合辞と同じ役割を果たす。

全社的リストラ、大衆的人気、モデル的店舗

気持ち的な負担、わたし的には反対

これらA、B、Cのうち、「最も基本的で、慣習化の程度・認知的際立ちが高い」といった特徴を持つものは、Aの意味であると考ええる。すなわちAをプロトタイプの意味と捉える。山下(一九九九)では、「的」の合成語が文中でどのような成分として用いられているかを調査した結果が示されている。それによると、二二・二〇一の用例の内、五六・七%が連体修飾成分である。すなわち、合成語「X的」が性質や状態を表して、被修飾語を限定する用法が過半数を占めるわけで、この点から見ても、基本的な意味・用法といえよう。

BはAからの拡張と捉える。「的」は「ような」という比喩指標に意味が変化しているが、合成語「X的」は、「Xのような」というメタファーを表している。つまり、メタファーを表

す合成語「X的」は、それ自身が何らかの性質や状態を含意するものということになり、それは、Aの意味に通じるものである。したがってBはAからの拡張と捉えることができる。一方、Cでは合成語やさらに大きな単位の連語や文脈によって、「的」が様々な複合辞と同様の意味を表すことになる。これを「的」の「助辞化」、すなわち「文法化」と捉えることにする。この

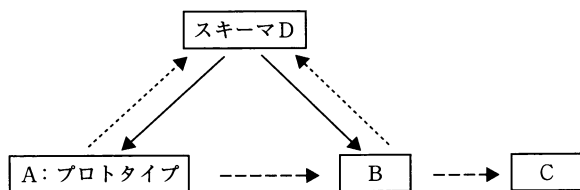


図 5

点は、Bが「ような」という比喻を表す助動詞と同じ役割を果たしていることに通じるもので、この点でBとCは共通している。したがって、CをBからの拡張と捉えることができる。

次に抽象化すなわちスキーマ化について考える。プロトタイプAとBの抽象化によって、スキーマD「Xから想起される性質や状態」が抽出される。「式」の場合と同様に、スーパースキーマは抽出できないと考える。以上の意味ネットワークを示したものが、図5である。

六 意味ネットワークから見た「式・風・的」と外界認知の差異

以上の分析から、意味ネットワークから見た接尾辞「式・風・的」についてまとめてみることにする。いずれもプロトタイプの意味から拡張して、合成語の意味をメタファーに変える意味を有する点で共通しているといえる。さらに、「式」と「的」は、文法化という意味拡張を見出させる点でも共通している。このような意味の拡張は、語彙的要素である字音接尾辞の意味の「主観化」と「文法化」と捉えることができる。すなわち、例えば「式」の意味が、「システム・方法」の意味から「ような」というメタファーの意味に拡張したことは、深田(二〇〇八)が述べるように「外部世界という具体的な物理的な領域に関する意味から心理世界などの抽象的な領域に関わる意味に拡張した」といって、これは主観化の一過程と見なせるということだ。

深田(二〇〇八)は、文法化の段階について以下のように述べている。

本来Aという意味を表す語彙的な要素として存在していた言語表現(Aの段階)が、ある段階でその使用文脈を広げ、A以外の、しかしながら、Aの意味から語用論的に推論可能な文法的意味を表すようになり(A、Bの共存段階)、やがて元のAの意味の希薄化・消失という段階を経て、Bの意味のみを表す文法的な要素として確立する(Bの段階)。

「式」や「的」の「文法化」と捉えた意味は、「A、B共存段階」にあるものと思われる。また、主観化という点では、文法化と捉えた意味、すなわち「式」の「と／との」の意味を添加して例示を表す意味や、「的」の「における／として／の面で」などの意味は、前接語に話者の評価や判断を反映した意味を添加していると捉えられ、主観性が含意されているといえるだろう。そもそも、「式・風・的」ともに形容動詞語幹を形成する相言類接尾辞であり、事態を形容することには、自ずと話者の主観的判断や評価が含意されることになるだろう。

次に、「日本式建築・日本風建築 日本的建築」のように、「X的Y・X式Y・X風Y」と、いずれでも表現しうる場合について述べることにする。

荒川(一九八六)では「日本式建築」と「日本風建築」の意味の違いについて、「前者はざぱり日本固有の方式ということであり、後者はそういうふんいき・形態をそなえたということ

である」と述べている。「日本式建築・日本風建築・日本的建築」はいずれも、合成語「X+接尾辞」がプロトタイプの意味を表すと解釈できるが、本稿では、「日本式・日本風・日本的」のいずれで表現するかは、話者の外界認知の差異によって決まるものと考ええる。その違いは、以下のように記述される。

「日本式建築」は、その建築に対して、例えば日本の建築方法、木の柱と壁で瓦の屋根を支えるとか、何かしら具体的なシステムをプロファイル（焦点化）して、それを日本のシステムに合致すると認知した表現と捉えられる。それに対して、「日本風建築」は、日本の建築が有する特色、例えば、木と土と紙でできているとか、玄関や庭に面する廊下（縁側）があるなどを備えていて、日本の雰囲気を感じると視覚的に認知した表現といえるだろう。また、「日本的建築」は、対象となる建築に対して、そこに「日本」を想起させる性質や状態を全体的に感じ取るということで、より抽象的な表現といえよう。

すなわち、プロトタイプの意味における外界認知の方法としては、「X式」は、Xが有する何らかのシステムをプロファイルした捉え方であり、限定的、具体的といえる。それに対して「X風」は、Xから醸し出される雰囲気や視覚的、場合によっては聴覚的にプロファイルした捉え方で、感覚的といえる。「X的」は、Xに通じる性質や状態をプロファイルするもので、より包括的、抽象的といえるのではないか。

七 おわりに

本稿では、これまでの論考で指摘されてきた、接尾辞の意味について、認知意味論の立場から記述することを試みた。

このような研究はまだあまり多いとはいえず、本稿における意味分析や記述の方法が必ずしも説得力のあるものになっているとはいえないかもしれない。しかし、字音接辞についての意味論的研究はまだまだ限られたものについてなされているに過ぎない。造語力を発揮する字音接辞について、多義性のあるもののプロトタイプの意味を明確にし、その意味的関係を記述することは、日本語の語構成研究や日本語の語彙教育への応用のためにも必要なことと思われる。本稿のような意味論の研究をその方法論も含めて、さらに深化させることが、今後の課題といえるだろう。

注

(1) 初山・深田(二〇〇三)では、シネクドキーは「より一般的な意味をもつ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味をもつ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喩」、メタファーは「2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩」と定義されている。「類似性に基づく」とは、そこに共通する

性質や状態を見出すことに他ならない。

- (2) スーパースキーマは、カテゴリーに属するすべての事例に共通するスキーマのことである。ここでは、「式」の意味AからDに共通するスキーマということになる。

- (3) 初山・深田(二〇〇三)では、意味の主観化について、話者の信条や態度に関わる意味への変化のことに説明している。

引用文献

荒川清秀(一九八六)「一性 一式 一風」『日本語学』第五卷

三号 明治書院

金澤裕之(二〇〇五)『「的」の新用法について』『日本語科学』

一七 国立国語研究所

国立国語研究所(二〇〇六)『現代雑誌二〇〇万字言語調査』

深田智・仲本康一郎(二〇〇八)『概念化と意味の世界』研究

社

初山洋介(二〇〇一)「多義語の複数の意味を統括するモデル

と比較」(『認知言語学論考』1 ひつじ書房)

初山洋介・深田智(二〇〇三)「第3章意味の拡張、第4章多義性」

『認知意味論』大修館書店

山下喜代(二九九七)「字音形態素「式」の機能」『青山語文』

第二十七号

山下喜代(二九九八)「字音形態素「風」について」『青山語

文』第二八号

山下喜代(一九九九)「字音接尾辞『的』について」『森田良行
教授古稀記念論文集』明治書院

山下喜代(二〇〇〇)「漢語系接尾辞の語形成と助辞化——「的」
を中心にして——」『日本語学』第一九卷一三号 明治書院

山梨正明(二〇〇〇)『認知言語学原理』くろしお出版

Langacker, R. W. (一九八七)『Foundations of Cognitive Grammar,
Vol.1』(Stanford University Press)

Langacker, R. W. (二〇〇〇)「動的使用依拠モデル」(坪井栄治
郎(訳)『認知言語学の発展』ひつじ書房)

(やました・きよ／本学教授)